

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520279

研究課題名(和文) 冷戦期における合衆国ナショナリズムとソフト・パワーとしての表象文化の研究

研究課題名(英文) the Nationalism of the United States and Representations as Soft Power during the Cold War Era

研究代表者

村上 東 (MURAKAMI, Akira)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：80143072

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：予定より遅れていた『冷戦とアメリカ 覇権国家の文化装置』(臨川書店)を2014年3月に刊行し、成果を世に問うことができた。問題意識を共有する執筆者を得て成果を活字にできたのみならず、この論集を読んでくれた方々と意見の交換、研究の相互乗り入れが以前よりも容易になったという大きな副産物を確保している。また、新たに基盤研究(C)「冷戦期合衆国表象文化(史)とナショナリズム/ソフト・パワーの関係性に関する研究」を採択していただくことが叶い、調査・研究を継続、発展する途が開かれた。

研究成果の概要(英文)：Our collection of academic papers was long overdue, but finally in March 2014 it was published. We are fortunate to have contributors with whom we share the same goals; and moreover, through this publication, we find more researchers who wish to proceed in the same direction. This is a great byproduct and certainly facilitates our research. Thanks to the new research grant (" the Relationships between the Representation (History) of the United States and its Nationalism and Soft Power "), we have been given the opportunity to continue and deepen our understanding of the subject.

研究分野：英米文学

キーワード：冷戦期 合衆国文化 ナショナリズム ソフト・パワー

1. 研究開始当初の背景

冷戦期の表象文化とナショナリズムに関する研究は多岐にわたって進んでいる。例えば、作品研究の分野では、Alan Nadel, *Containment Culture: American Narratives, Postmodernism, and the Atomic Age* (Duke UP, 1995) や David Seed, *American Science Fiction and the Cold War: Literature and Film* (Edinburgh UP, 1999) などが挙げられるし、日本においても山下昇(編)『冷戦とアメリカ文学 21世紀からの再検証』(世界思想社、2001)は冷戦期(レッド・パージ期)に発表された文学作品についての注目すべき作品論を数多く掲載している。文学批評(批評理論)の分野においては、Fredric Jameson, *The Political Unconscious: Narrative as a Symbolic Act* (Cornell UP, 1981)を突破口として、新批評批判、キャンノン批判として深化を示している。日本でも、大田信良の一連の仕事(例えば、「批評理論の制度化についての覚書 トランスアトランティックな文学・文化研究のために」(一橋大学大学院言語社会研究科 2009 年度紀要『言語社会』第4号)はジェイムスンやサイードの達成を引き継ぐものとして注目に値する。冷戦期に成立した批評制度の批判者の多くがヨーロッパを足掛かりしていった事実に関しては、国際関係やソフト・パワーの観点からさらなる検討が必要となる。

また、民主主義というナショナリズムの仮面によって葬られていたヘミングウェイの社会批判者としての側面の再評価作業は Cary Nelson らによって進められているし、日本でも、宮本陽一郎、「ヘミングウェイの南西島共和国」(2004 年日本アメリカ文学学会全国大会で村上が企画・司会を担当したシンポジウム「カリブ、豊穡なる空白」で発表され、のちに『アーネスト・ヘミングウェイの文学』(ミネルヴァ書房、2006)に掲載)や村上東、「ふたつの大きな物語の狭間で 冷戦期に至るヘミングウェイの軌跡」、『ヘミングウェイ研究』(2007)によって、合衆国文学のアイコンであるヘミングウェイ像がナショナリズムにとって、そしてソフト・パワー化にとって都合のよいように読み換えられていった過程が明らかにされている。カート・ヴォネガットに関しても、SFあるいは大衆小説という扱いで、あれだけ読まれていても、キャンノン化が遅れていたいきさつを考える時期に来ている。

1930年代の合衆国表象文化には、ナショナリズム的な色彩が色濃く盛り込まれていた。合衆国資本主義・対・社会主義の時代と考えられがちだが、合衆国の民主主義という土壤に社会改革の花が咲くと思われていたためである。そのうえ、ファシズムの台頭から人民戦線への流れ、左翼勢力とニュー・ディール政策との近似性も手伝い、当時の合衆国共産党は「共産主義は二十世紀のアメリカニズ

ム」と謳っていた。映画の世界で言えば、こうした合衆国民主主義との親和性を持った左翼知識人の表象は対ファシズム戦意高揚映画の量産体制へと進んでゆく。映画『怒りの葡萄』、『誰が為に鐘は鳴る』はそうした流れのなかで捉え直すことができよう。そして、戦後、自由主義世界の覇者となった合衆国にとって、映画は民主主義の神話を売るソフト・パワーとして重要性を増してゆく。新しい女性像を世に問いつつ合衆国(民主主義)の優位性を謳う『ローマの休日』もソフト・パワーとしての威力を持っていたし、合衆国批判を前面に打ち出したロバート・アルトマン作品も、ナイが指摘するように、ソフト・パワーとしての意味を持ってしまう。後者について言えば、アルトマン作品を評価する他国の合衆国覇権主義批判者も、皮肉なことに、合衆国文化ヘゲモニー強化に貢献しているのである。だが、こうしたナショナリズム/ソフト・パワーの視点を備えた映画研究は少ない。

手短かにまとめれば、合衆国のナショナリズムを軸にして全体の流れを見渡す作業は充分とは申せないし、表象文化作品がソフト・パワーとして果たした役割に関する研究は、見受けられない(ソフト・パワーとしての工業製品と冷戦期の国際関係に関しては Greg Castillo, *Cold War on the Home Front: Soft Power of Midcentury Design* (U of Minnesota P, 2010)があるが)。こうした遅れを取り戻そうする試みとして、2009 年第 48 回日本アメリカ文学学会全国大会シンポジウム「今一度冷戦を振り返って」を村上が企画した(発表者は本研究の研究分担者である)。しかし、従来のレッド・パージやニューヨーク知識人と南部農本主義の蜜月といった議論を乗り越える視座として、ナショナリズムそして覇権主義すら商品化する合衆国文化ヘゲモニーの運動を十分に提示できたとは言えず、今後の努力が問われる結果に終わっている。本研究は、新しい局面を迎えつつある冷戦期表象文化研究を、ソフト・パワーという概念の導入によって、また、日本及びヨーロッパ(殊にイギリス)と合衆国の錯綜した関係を視野に収めることによって、一歩先へ進めようとするものである。

2. 研究の目的

冷戦期の合衆国表象文化の政治学を考察するものであり、その全体像を、ソフト・パワーとしての側面を前景化しつつ、文学、映画、文化全般(とそれらに傾注された批評・研究)の各分野を点検しながら、再構築することを目的とする。言い換えれば、自国における文化資本の生産が、対外的にもソフト・パワーとして商品価値を持つゆえに、世界的な文化ヘゲモニーの確保につながり、ナショナリズム強化策として自国に還流してゆく構図を、殊に今回は日本における合衆国表象文化(ならびに表象文化研究)の受容も手掛かりとし

て、なるべく多くの具体的事例について明らかにしておく。

全体構想を示す研究テーマは「冷戦期における合衆国ナショナリズムとソフト・パワーとしての表象文化の研究」である。研究対象となるものは、枢軸国を倒したあと、ソヴィエト連邦を中心とした社会主義勢力と冷たい戦争で向き合うことを意識して政策立案をはじめたフランクリン・デラノ・ルーズベルト政権の時代から冷戦期の影響を強く残す現代に至るアメリカ合衆国の（主として文学と映画の分野における）表象文化作品とそれらを扱った研究・批評である。殊に、民主主義の守護神として合衆国国民に自信と愛国心を抱かせ、同時に同盟国に民主主義を教え合衆国の優位性を印象付ける作品とそれらに関する研究・批評を対象とする。そして、ソフト・パワーという概念の提唱者であるジョーゼフ・ナイ自身が述べているように、合衆国の社会や政治に対し批判的な作品も、批判を許容する合衆国の民主主義を印象付け、検閲の厳しい社会主義圏との差異を示すがゆえに、同時に考慮せざるを得ない。また、マイノリティや女性、同性愛者に関する表象と批評も、それらが合衆国民主主義の拡大・深化を内外に示すものであるゆえに、ソフト・パワーとして機能する点も見逃せない。

3. 研究の方法

準備段階の作業として、戦後のソフト・パワーとして機能する作品、言説が量産される体制が構築されるまでの過程をたどるため、その中心となった（活字、映像を問わず）作家や作品の文献調査・研究を行う、と同時に、歴史と政治の文献にあたる。第二段階では、ソフト・パワー量産体制の強化から合衆国ナショナリズムを批判する作品もソフト・パワーとしての役割を担わされてゆく過程をたどるため、その中心となった作家や作品の文献調査・研究を行う。論文集『冷戦とアメリカン・カルチャー』（臨川書店、企画・編集は村上、研究代表者と研究分担者以外に8名が執筆。平成23年度刊行の予定が震災の影響等で大幅に遅れ、実際は25年度末の刊行であった）以後、研究の進捗状況を点検する。最終段階としては、それまでの研究を継続しつつ、成果をさまざまなかたちで公表する。

4. 研究成果

震災の影響などで遅れていた『冷戦とアメリカ 覇権国家の文化装置』（臨川書店）を最終年度に出版。赤狩りや反共産主義キャンペーンといった、文化現象においてもはっきりと見える側面（つまり以前から研究され、一般書にも書かれている事柄）ではなく、可視化されていない部分を大きく取りあげたこと（日米関係からみた合衆国文化装置、ずらされて描き出される核・放射能の映像、対抗文化と同床異夢であった薬物による人間管理、冷戦作家の範疇に入らないカポータ

に読みとる冷戦、など）ナショナリズムとソフト・パワーという私たちの問題意識から冷戦期合衆国文化の対外的な機能（対外的な文化戦略の対象であった日本における合衆国冷戦文化受容、など）殊にモダニズムと新批評の＜覇権国家の文化装置＞としての機能及びそれらの成立過程をかなりの程度明らかにできたこと（従来はニューヨーク左翼系知識人が議論の中心であったが、私たちは南部の文学者兼大学教授の動向を押さえ、両者の関係を前景化すると同時に、オリエンタリズムばかりが注目されるエドワード・サイードが冷戦文化戦略の批判者であったこともはっきりと指摘している）が収穫である。また、純文学として評価されることの少ないヴォネガットを冷戦期の合衆国を代表する想像力として位置づけてもいる。私たちが研究対象としている範囲はかなり広く、口頭発表や論文で成果を報告した内容は多岐にわたるため、ここでは書籍のみを記すが、この論集『冷戦とアメリカ』以外でも、塚田『シネマとジェンダー』（臨川書店）、中山『現代作家ガイド6 カート・ヴォネガット』（彩流社）、大田『帝国の文化とリベラル・イングランド』（慶大出版会）、村上『高校生のための地球環境問題入門』（アルテ）などの成果を踏まえた研究を着実に続けている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件、すべて単著）

村上東 「シオン大通りの時代とエドワード・ルイス・ウォーレント」『秋田英語英文学』55 (2014) 12-23

大田信良 「The Years、リベラリズム、アソシエーション ブルームズベリー・グループの政治文化」『英文学研究』（支部統番号）4 (2011) 1-11

大田信良 「エリオットの文化論、制度としての「英文学」、クリエイティブ産業 1990年代英国カルチュラル・スタディーズ/文化政策学のあとで」 *T. S. Eliot Review* 24 (2013) 1-21

塚田幸光 「シネマ・アンド・ウォー ヘミングウェイとメディアの性/政治学」『ヘミングウェイ研究』12 (2011) 31-46

塚田幸光 「「性」を＜縛る＞-GHQ、検閲、田村泰次郎「肉体の門」-」『先端社会研究所紀要』11 (2014) 47-60.

塚田幸光 「繭と穴-ハ・ジン、フォークナー、交叉する語り(カイアズマティック・ナラティブ)-」『AALA Journal』19 (2014) 10-21.

〔学会発表〕(計 18 件)

村上東 「ソフト・パワーとしての『ローマの休日』」日本英文学会東北支部 2011NOV26 東北大学

Akira MURAKAMI Fukushima Problems: An Overview Fukushima: One Year Later panel (招待講演)2012MAR08 SUNY at Stony Brook

村上東 「ザ・バンドの作品とナショナリズムの問題を考える」日本英文学会東北支部 2012NOV17 岩手県立大学

村上東 「『怒り』から冷戦への軌跡 合州国左翼運動からみたスタインベック」日本ジョン・スタインベック学会 2013MAY27 フォレスト仙台

大田信良 「『トーマス・ハーディ研究』と金融資本 スパイ小説、"Sex Novels"、"教養小説"」日本ロレンス協会 2011JUNE25 神戸大学

大田信良、大谷伴子 「グローバル・ポピュラー・カルチャーあるいはメディア文化のなかの「英文学」 文化冷戦のなかのウルフとラティガン」日本ヴァージニア・ウルフ協会 2014MARCH15 同志社大学

塚田幸光 「核とマネキン ニュークリア・シネマの政治学」ASLE-Japan 文学環境学会全国大会 2011AUG27 明治大学生田キャンパス

塚田幸光 「顔と戦闘 Hemingway、Ivena、ポリティカル・スペイン」日本アメリカ文学学会全国大会 2011OCT8 関西大学

塚田幸光 「「食」をめぐる政治学 マカジキ、カニバリズム、「老人と海」」日本ヘミングウェイ協会 2012MAY26 専修大学

塚田幸光 「フリークス・アメリカ ヘミングウェイ、ロン・チャニー、身体欠損」アメリカ学会 2012JUNE02 名古屋大学

塚田幸光 「クロスメディア・ヘミングウェイ ニューズリール、ギリシャ・トルコ戦争、「スミルナの棧橋にて」」日本アメリカ文学会東北支部 2012SEPT08 東北大学

塚田幸光 「焼跡の「アメリカ」-GHQ、性、田村泰次郎「肉体の門」-」比較文学会関西支部 2013APR20 甲南大

塚田幸光 「二つの文芸とアメリカの影-イーロン・リー、ハ・ジン、ディアスポラ-」(シンポジウム「アジア系アメリカ文学再読-アメリカ文学研究のパーспекティヴから」招

待講演)アジア系アメリカ文学研究会 2013SEPT23 神戸大学

塚田幸光 「ニューシネマ・ターザン-チーフアー、ベリー、『泳ぐひと』」(シンポジウム「物語はジャンルを横断する」招待講演)日本アメリカ文学会北海道支部大会 2013DEC14 北海学園大学

塚田幸光 「シャドウ・ビハインド-上山草人と「奇」のハリウッド-」早稲田大学演劇博物館(招待講演)2014JAN29 早稲田大学演劇博物館

中山悟視 「愛憎のアンビバレンス Kurt Vonnegut とSFあるいはポストモダン」日本英文学会東北支部 2011NOV27 東北大学

中山悟視 「不遇の作家キルゴア・トラウトを読み直す」、中・四国アメリカ文学会 2013JUNE08 松山大学

中山悟視 「再演されるポストモダン Vonnegut、SF、メタフィクション」(全国大会シンポジウム II <ポストモダニズム、SF、批評>) 日本アメリカ文学会 2013OCT13 明治学院大学

〔図書〕(計 14 件)
秋田市立秋田商業高等学校ビジネス実践・ユネスコスクール班『高校生のための地球環境問題入門』アルテ 2012 190 頁(村上が執筆)

川端康雄(他編)『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2000 年』慶應義塾大学出版会 2011 378 頁(大田が執筆)

塚田幸光(編著)『映画の身体論』ミネルヴァ書房 2011 262 頁

野田研一(編著)『<風景>のアメリカ文化学』ミネルヴァ書房 2011 288 頁(塚田が執筆)

今村楯夫(他編著)『アーネスト・ヘミングウェイ 21世紀から読む作家の地平』臨川書店 2012 396 頁(塚田が執筆)

三浦玲一(編)『文学研究のマニフェスト ポスト理論・歴史主義の英米文学批評入門』研究社 2012 205 頁(大田が執筆)

大田信良『イギリス映画と文化政策 ブレア政権以降のポリティカル・エコノミー』慶應義塾大学出版会 2012 201 頁

杉野健太郎(編著)『交錯する映画 アニメ・映画・文学』ミネルヴァ書房 2013 370 頁(塚田が執筆)

丸橋良雄(編著)『越境する文化』英光社

2012 201 頁（塚田が執筆）

今村楯夫・島村法夫（監修）『ヘミングウェイ大事典』勉誠出版 2012 956 頁（村上と塚田が執筆）

巽孝之（監修）『現代作家ガイド6 カート・ヴォネガット』彩流社 2012 285 頁（中山が執筆）

村上東編著『冷戦とアメリカ 覇権国家の文化装置』臨川書店 2014 403 頁（村上、大田、塚田、中山が執筆）

高野泰志編著『ヘミングウェイと老い』松籟社 2013 335 頁（塚田が執筆）

花岡秀編著『アメリカン・ロード 光と陰のネットワーク』英宝社 2013 310 頁（塚田が執筆）

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上東（秋田大学）

研究者番号：80143072

(2) 研究分担者

大田信良（東京学芸大学）

研究者番号：90233139

塚田幸光（関西学院大学）

研究者番号：40513908

中山悟視（海上保安大学校）

研究者番号：40390405

(註)2015 年 4 月より尚絅学院大学

(3) 連携研究者

()

研究者番号：